

《一》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

私の世代には、「シートン動物記」を読んで育った人が多いはずだ。とりわけ動物に関係する職業についている人たち、獣医、動物園のシイク係、動物学者などは、その道を目指したきっかけになったと考える人も少なくない。オオカミ王ロボ、キツネのスカーフエースやビクセンが、人間に追い詰められながらさまざまな知恵を発揮して生き抜いていく様子を、息を凝らし、はらはらしながら読みつないだものだ。それが私の野生動物への興味を駆り立て、野生のゴリラの研究に向かわせた。B エンインになっていると思う。

第二次世界大戦の直後に、京都大学で動物社会学という新しい学問が始められたとき、研究者たちは自らをシートニアンと称した。ウマ、シカ、サル、ウサギの一頭一頭に名前をつけ、その行動をつぶさに記録した。ちょうどシートン動物記のように、名前の付いた動物の個体同士のやりとりを描写し、動物たちの社会的な知覚力を推察したのである。ただ、日本の研究者はシートンのように動物の英雄だけでなく、群れに属する全ての個体を考慮した。また、動物を人間の言葉で語らせるのではなく、彼らの声や表情やしぐさの意味を理解しようとした。文学ではなく、科学として動物の社会を明らかにする試みだったからである。

しかし、①この試みは欧米の学者から強く批判された。言葉を持たない動物に名前をつけ、その行動を記述することは、動物が人間のような心を持つと見なす誤った考えであるというのである。当時、動物を擬人的に見ることを強く戒める風潮が欧米にはあった。文化も社会も言葉を持つ人間だけに可能なものであり、動物は本能の働きに従って外界の刺激に機械的に反応しているだけだと考えられていた。実はシートン動物記も欧米の少年少女たちにあまり知られていない。②動物学者たちに尋ねても、シートンを知らない人が多いのである。

西洋の昔話では、動物は人間になれない。動物に変身させられた人々が勇気ある行為に助けられて復活する物語ばかりだ。そこには人間と動物との間に決して超えることのできない境界がある。C タイショウ的に日本の昔話は、動物が人間になって一緒に仕事をしたり、食事をしたり、結婚して子どもを作ったりする。ただ、動物たちは人間の姿になるだけで、人間とは違う心を持ち、人間にはない力を発揮する。日本人は、そのような動物たちとこの世界に共存している実感を持って暮らしてきたように思う。

だから、日本の動物学者たちはシートン動物記をあまり違和感なく受け入れたのだろう。かくいう私もニホンザルとゴリラの研究を始め、彼らとのやりとりを通して彼らの心のありようを強く意識するようになった。ある時、ゴリラのオスが近づいてきて、私の顔をじっと見つめた。相手の顔をのぞき込む行為はニホンザルでは威嚇を意味するので、ゴリラにまだD けられていなかった私は目をそらして下を向いた。そうすれば、ニホンザルなら私に敵意がないとみて、のぞき込むのをやめる。ところが、ゴリラはなお顔を近づけてきて執拗にのぞき込み続けた。そして、私が態度を変えないと不満そうにE ムネをたたいて去っていった。

それを見て、私はゴリラのことを誤解していたことに気づいた。相手の顔をのぞき込むのはゴリラでは威嚇ではない。このゴリラは恐らく私にあいさつをするか、遊びたかったのである。のぞき込むという行動の意味が、ニホンザルとも人間とも違っていたので、私にはすぐにわからなかったのである。でも、この時、ゴリラは明らかに私に働きかけ、私からゴリラの間で通じる反応を期待したのである。それは、ゴリラが私を仲間に受け入れようとした態度の現れである。ここにゴリラの心があると言えないだろうか。

20世紀後半の野生動物の研究は、動物に独自の文化や社会があることを明らかにした。チンパンジーやオランウータンなど人間に近い類人猿の研究者たちは、日本の研究者と同様に個体に名前をつけてその行動を記録している。彼らが人間とはちよつと異なる、でも私たちに理解可能な心を持っていることがわかってきた。驚いたことに、これらの動物たちは激しい敵意を抱いていても、いつしか人間を受け入れてくれる。それは野生の動物たちが異種の動物と※していこうとする心をもっていることを示している。

シートンは、人間に追い詰められ、滅びていく野生動物の姿を描いた。それから100年たった今、私たちは動物たちの行動の意味をより詳しく理解できるようになった。でも野生動物たちはますます絶滅の危機に瀕している。それは、その知識を人間が動物たちと共存するためではなく、利用するために使っているからだ。今、大事なことは、共存し触れ合おうとする動物たちの心を感じ取ることではないだろうか。まだ私たちはシートンを超えることができていないのである。

(山極寿一「時代の風・シートン動物記から100年」

毎日新聞 2012・6・24)

注 シートニアン——シートンの考え方を正しいと思い、それに従う者、という意味の造語。

問一 二重傍線部 i 「息を凝らし」、ii 「つぶさに」、iii 「威嚇」の本文中での意味として最も適切なものを、次の中から選び、符号をそれぞれ書きなさい。

i					ii					iii				
イ	激しく呼吸をし	ロ	深刻に思いつめ		イ	もれなく	ロ	学問的に		イ	不思議に思うこと	ロ	おどかすこと	
ハ	思いで心が満たされ				ハ	機械的に				ハ	調べること			
ニ	深くため息をつき				ニ	いきいきと				ニ	怒ること			
ホ	息をとめて集中し				ホ	幅広く				ホ	疑ってかかること			

問二 空欄※に入る最も適切な漢字二字の語を本文中から抜き出して答えなさい。

問三 傍線部①「この試み」とは、どのような試みか。次の空所にあてはまるように、文中から三十字以上四十字以内の表現を採し、最初と最後の五文字を抜き出して答えなさい。

ようとする試み。

問四 傍線部②「動物学者たちに尋ねても、シートンを知らない人が多い」のはなぜか。シートン動物記の特色をふまえて、九十字以内で理由を説明しなさい。

問五 この文章の題名は「シートン動物記から100年」である。シートン動物記から100年たった現在、私たちはどのような状態にあると筆者は考えているか。百三十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部 A～E を漢字に改めなさい。

〈五十点〉

《二》次の I・II の問いに答えなさい。

I 次の①～⑤の傍線部のカタカナの語を漢字に改めなさい。

- ① 作文コンクールでの文部科学大臣賞受賞の知らせは、セイテンの霹靂だった。
- ② 妹にとって鉄棒の逆上がりはシナンの業だった。
- ③ サケは生まれた川へカイキする習性がある。
- ④ 父は大変気に入っていた愛車をダンチョウウの思いで手放した。
- ⑤ 学園生活ではさまざまなシツを持った友人に出会った。

II 次の⑥～⑩の□に最も適切な漢字を入れて四字熟語を完成しなさい。

- ⑥ □ 刀直入
- ⑦ 不 □ 流行
- ⑧ 無病 □ 災
- ⑨ 百家争 □
- ⑩ □ □ 強記

〈十点〉

《三》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

わたしが小学一年生だった時のことだ。春学期が始まって間もない頃、クラスのひとりの女の子が、日記をつけはじめた。ただ日記をつけるのではなくて、毎朝、先生に日記 ^A チョウを提出する。すると先生は、その日の終わりまでに赤ペンで短い感想を入れて、返してくれるのだ。

それは素晴らしいことだった。わたしも、子供心に、日記をつけるとは感心、感心、と心の中で拍手を送っていた。だが、そのあとがいけなかった。先生がその女の子をあんまり褒めたので、まわりの子たちも「負けてなるものか」と、すぐに女の子のまねをして日記をつけはじめたのだ。この時だった、わたしの中に、わるい予感がむくむくとふくれあがっていったのは。

予感的中した。最初に女の子につづいたのは四、五人だったろうか。だが、それはすぐに十人になり、あっという間に二十人になった。そして、気がついた時には、わたし以外のすべての児童が日記をつけ、かつ、それを毎朝先生に提出している、という恐ろしい状況が生まれていた。

わたしはどうしても日記を書きなくなかったので、クラスに「日記旋風」が吹き荒れていることを家では内緒にしていた。それは、薄氷の上を歩くような思いだった。わたしは息を殺して、まず右足を出し、しばらく様子を見てから左足を出した。だが、^B アンジョウ、^① 氷は思っていたよりずっと薄かった。

ある時、授業参観で学校を訪れた母は、「日記旋風」のことを知るべくして知ってしまったのだ。その日の夜、わたしは家で母から問い詰められ、^C キビしく叱責をうけた。もう逃げられなかった。その時までには、内濠も、外濠も、すっかり埋められていた。濠を埋めるために大急ぎで狩り出された人足たちの息づかいまでが、耳元で聞こえるかのようなようだった。

あきらめたわたしは、重い足をひきずるようにして文房具屋をおとない、日記チョウをあがなった。そして、今だから告白するが、このころの中では、いちばん最初に日記をつけはじめた女の子のことを恨み始めていた。

だが、人生とはわからないものである。クラスを席卷した「日記旋風」のその後には、どんな気象予報士も予想出来ない ^D テンカイが待っていた。というのも、しばらくすると、最初に始めた女の子が、ある日を境にしてぱたりと書くのを止めてしまったからである。このことがクラスのみんなに与えた衝撃は、はかり知れなかった。「こんなはずじゃなかった」という嘆息がどこからともなく漏れ、一同の士気は削がれ、動揺はみるみるうちに広がっていった。

一人が止めると二人が止め、二人が止めると五人が止めた。それは、^② まるで良くできたドミノ倒しのようだった。ぱたぱたと音を立ててドミノは倒れていき、気がつくと、クラスの中で日記をつけているのはわたしだけという、逆の意味で恐ろしい状況が生まれていた。

なぜ、わたしのドミノだけが倒れなかったのか、良くわからない。ただ、自分の意思で始めたわけではなかったで、自分の意思で終わらせることもできなかった、としかわたしには言えない。結婚にたとえれば、日記とわたしは、親に強いられた「見合い結婚」だったが、^③ ほかの子たちの「恋愛結婚」よりはるかにうまくいった、ということだろうか。

時々先生が、みんなの前でわたしの日記を読み上げることもあった。内向的だったわたしは、それがいやで仕方なかった。だが、わるいことばかりではなかった。日記に良いところを書いてほしいと思ったのだろう。クラスのガキ大将のような子たちが ^④ 状況を察して、わたしに優しく、親切になったのだ。わたしは、何だかおかしかった。

結果として、わたしは小学校の六年間、毎日日記を書きつづけることになった。そして、わたしは少しずつ、「言葉って面白いな」と思うようになっていった。もし日記をつけていなければ、^E チョウじて詩を書きはじめることなど、およそありえなかったろう。^⑤ 今では、あの時いちばん最初に日記をつけはじめた女の子に、心から感謝している。

問一 傍線部①「氷は思っていたよりずっと薄かった」とは、どういうことを述べたものか。具体的に八十字以内で説明しなさい。

問二 傍線部②「まるで良くできたドミノ倒しのようだった」とは、どのような状況を表現したものか。四十文字以内で説明しなさい。

問三 傍線部③「ほかの子たちの『恋愛結婚』」とは、どういうことを述べたものか。次の中から最も適切なものを選び、符号を書きなさい。

- イ わたし以外の子たちが、女子に好かれるため日記を書いていたこと。
- ロ わたし以外の子たちが、みんなの様子を見て日記を書いていたこと。
- ハ わたし以外の子たちが、先生に好かれるため日記を書いていたこと。
- ニ わたし以外の子たちが、自ら書きたくなって日記を書いていたこと。
- ホ わたし以外の子たちが、親からすすめられて日記を書いていたこと。
- ヘ わたし以外の子たちが、元々好きだったから日記を書いていたこと。

問四 傍線部④「状況を察して」とあるが、「ガキ大将のような子たち」が察したのはどのような状況か。次の中から最も適切なものを選び、符号を書きなさい。

- イ わたしだけが先生に日記を提出しており、今も続けられていることが尊敬されている、という状況。
- ロ わたしだけが先生に日記を提出しており、そのためわたしが先生に気に入られている、という状況。
- ハ わたしだけが先生に日記を提出しており、わたしが見たことは先生やみんなに伝わる、という状況。
- ニ 先生が時々わたしの日記を読み上げたので、わたしが日記をやめられなくなっている、という状況。
- ホ 先生が時々わたしの日記を読み上げたので、わたしが書いていることが有名であった、という状況。
- ヘ 先生が時々わたしの日記を読み上げたので、みんながわたしに感心するようになった、という状況。

問五 傍線部⑤「今では、あの時いちばん最初に日記をつけはじめた女の子に、心から感謝している」とあるが、それはなぜか。八十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部 A ～ E のカタカナを漢字に改めなさい。

〈四十点〉

